



●**座長（塚田）**— どうもありがとうございます。あらためてまとめる必要がないほど、きちんとまとめられておまして、なおかつ、映像からは民族の暮らしぶりが見えてきます。それとともに、漢族的要素がところどころに入っており、チベット族の独自の要素とが併存しているような印象を受けました。

ご発表では、彼らの暦法に基づく祭りは、シャーマンが主催する山の神祭りをして農作物の豊作を祈願する独自の方式から、漢族式の春節を受容していき、その点で、漢族との共生がなされつつあるという実情を、たいへんわかりやすく解説していただきました。

では、時間も押しておりますので、早速ですがコメントへ移らせていただきたいと思います。まず長谷川先生、よろしくお願いたします。

●**長谷川**— 長谷川です。コメントの機会を与えていただきまして、ありがとうございます。松岡先生に対してのコメントですが、私は松岡先生の本を読んで書評を頼まれたり、塚田先生の研究会ではコメントをお願いされたりと、非常にいいパートナーシップを持っているような気がするのです。

今日のお話は、先生の一番得意とするフィールドで、いろいろな資料をお持ちのところを見せていただいたのですが、しかし私自身は、この写真のどこにも行ったことがないわけです。少数民族研究という意味では同業者で内部なのですけれども、私からしてみると、これ自身はほんとうに想像のレベルで考えるしかなく、少数民族研究のなかでも内部の相互理解というか、いろいろと比較していく必要があるのかなと今回も感じました。

私としては、春節など具体的なものに入る前に、ここでいう地理的な藏彝走廊を考えてみたいと思います。私は雲南省の国境地域をずっと見てきていますが、中国の西南部に一つではない複数のエスニックグループがあって、しかもそれがユニークな地理的環境のなかに共存的で、共生的な関係によって配置されているところがあると思うのです。

そういったところを何と呼ぶのかは難しいのですが、例えば私が扱っている雲南省の国境地帯は、ここの地図をお借りしますと瀾滄江、怒江（サルウィン川）の下流、ないしはビルマ寄りというのでしょうか、そのあたりも走廊という言い方はしませんが、民族が交流し合う非常にユニークな、マルチエスニックな地域になっているわけです。

では、まずそういったところの調査研究に関して、国家の側に立つ人たちによって、いつごろからその地域やそのエスニック集団が発見され、文化的な内容が検討されるようになったかといいますと、雲南辺境に関しては、やはり中華民国期だと思います。中華民国期の1930年代ぐらいから、中山大学の江応樑とか、田汝康であるとか、もちろん費孝通先生なども、直接ないし間接的にかかわっているかと思います。

一応、国家の領域ないし視野に入っているけれども、そのなかの実態がよくわからないところに対して、地理的な特性も含めて調べに行きます。そこで、いろいろな文化なりを比較して見ると、意外とこういう文化も存在しているという議論は、雲南辺境ですと民国期から始まっており、1950年代の社会歴史調査や民族識別などに継承されている経緯があります。

そういったマルチエスニックな地域には、いろいろな民族がいるのですが、その地域のなかで比較的主体的な役割を果たした集団があります。その周辺には、それと同系統であったり、あるいは生業が異なる集団があります。例えば山のほうで焼畑をやっているとか。それは主体民族から文化的な影響を受けたり、受けなかったりしています。

それとは別個なルートのもので、ほとんど後来だと思うのですがけれども漢民族が入ってきたりしています。私のやっているところだと非常に古くから交易者というかたちで行き来をしています。このような構成があると思うのです。そういうところから見たときに、この走廊と、そのほかのこういった多民族地域と、どのように比較していったらいいのかという問題が、ちょっと面白いなと思いました。

そのときに、国民国家という言葉を使っていいのかわかりませんが、近代国家ができてくるときに、時間と空間に対する支配をおこなってくるということは一般論として言えると思います。今日のテーマでは時間の問題を中心にお話しされていますが、民族の移住の時間には、アイデンティティとか、祖霊の帰る道とか、霊魂といったレベルで、その集団がたどってきた歴史的な経路が示されることがあります。

その場合には、これは雲南省も同じですが北から南への移動を示し、想像力レベルでは、いまある集団が祖先祭祀をするときに北のほうへ辿っていくかたちで、歴史の、時間軸のなかで民族移動が語られていくという問題があります。

他方、例えば私がやっているタイ族などは上座部仏教圏に入っているわけです。そうしますと、漢民族の文化伝統とは異なった大伝統を持った暦法が入ってきます。そこで当然、一つの時間のサイクルが入ってくることがあります。

そういう意味では、この地域における主体民族としてチベット系の時間のサイクルと、祖先祭祀といえますか、精霊崇拜といえますか、そういった時間軸とのあいだの問題があるのではないのでしょうか。それからもう一つ、漢民族の春節を中心にした農事暦の問題。さらにその外側には、国家の決めてくる時間軸という位相のなかで、何か時間をめぐる再編成の問題が考えられないかというのが一つです。

もう一つ。今日のお話には直接的には出ていませんでしたが、空間をどのように再編成していくかという問題です。例えばこういった多民族地域においては、交易の拠点などに関しても国家というものが、あるいは国家まではいかないけれども中間的な権力というものが、当然かかわってきて統治してきます。そうしますと、ここでは例えば土司といったローカルな政治権力、あるいはそれと関係があるような漢民族による交易拠点とか、小さな町とか、廟を中心にした宗教儀礼のサイクルといったところでの空間と時間が需要で、春節が入ってくるとはいつても、もう少し空間的なファクターを入れて考えることができないのかということも聞いていて思いました。

さらには、具体的に春節の問題は重要です。タイ族の場合で見えていきます。同心円で四つの円を描いた状態をイメージしてほしいのですが、一番内側は精霊祭祀のシャーマニスティックな、非常に不定形な、シャーマンが勝手に占いで日を決めていくような時間があります。その外側に——外側か、あるいはくっついているのかわかりませんが——上座部仏教の儀礼サイクルがあります。そこに、あとから入ってきたかどうかかわかりませんが、春節ないしは農事暦があり、そして国家の時間軸があります。

タイ族の例でいいますと、これは徳宏地域ですがポイというのがあります。ポイというのは仏教の儀礼でして、そこで春節はポイルンシーと呼ばれています。どう理解していいかわかりませんが、

春節が仏教儀礼の暦法のなかに読み替えられているという解釈もできるのではないかと思います。

そういう意味で、春節を自分たちの文化のサイクルのなかに読み替えていく行為などがなかったか。また、先ほど「ヲシ」の中身が春節のほうに変化していく、変わっていくという部分があったと思うのですが。

●松岡— 中身はほとんど変わらないようです。

●長谷川— 変わらないですか。

●松岡— 時間が変わるだけです。

●長谷川— そのように中身は変わらないけれども、違う場所、違う時間でおこなわれていく問題も、タイ族でそんなことがあるのかなと思うと、ポイルンシーはヲシとは違うタイプなのかなと思いました。

申しあげたいのは、漢民族の農業暦と違う大伝統を持った暦法があるところでは共存し合う部分がどうなのかということです。以上です。

●座長— ありがとうございます。

続きまして、周星先生にコメントをお願いいたします。よろしくをお願いいたします。

●周— 周と申します。松岡先生のご報告と長谷川先生のコメントを聴かせて頂いて、大変勉強になりました。私は、その地域のことをよく知らないものとして、適切なコメントが出来ないかなと自覚しております。

私も長谷川先生のコメントに同感致しました。ただ、松岡先生のレジュメに載せられた「藏彝走廊」というキーワードに幾つかの疑問を感じています。或いは、松岡先生の言い方で、「羌」も入れて、「羌藏彝走廊」ですね。この概念自体に対して、二つの疑問があります。

一つは、それは文化地理学とか民族地理学の概念として、漢族を無視し、漢族を見落としたのではないかという疑問です。つまり、その地域のチベット族とか、彝族、羌族とか、全て含まれていますが、漢族だけを除外したのですね。漢族はその地域にも住んでいますけど、その概念には存在していないように思われる。漢族の人たちは、あそこに存在しているかどうか、あるいはどういう形で生きているか、まさにこのテーマにとって、大きな問題ですね。

もう一つの疑問は、「藏彝走廊」の構想の中で、南北の流れだけを注目してきたということです。確かに、それは南北の間で、たくさんの民族が行ったり来たりする走廊ですが、東西の流れとか動きを見落とした問題もありますね。東の成都盆地から、あるいは黄土高原から、どんどんチベット高原に上がっていく漢民族の人たちや、チベット高原から次々に降りてきたチベット系の人たちが歴史上でたくさんいました。つまり、南北の流れに巻き込まれた諸民族が注目されましたけれども、東西の動きが見えなくなって、東西間の交流、「ひと」、「もの」そして文化の東西間の交流を見落としたのではないか。無論、これらの疑問は、松岡先生に対したのではなくて、学界の一般認識に疑問を感じたのです。

従来、人類学者として、ある地域に入ると、とりあえず少数民族を研究する、同じ地域に住んでいる漢民族は、研究しなくてもなんとなくわかっているという感じですね。漢民族はイメージするだけで、ほんとうに十分でしょうか。民族学者は、中国全土どこでも通用する漢族のイメージを持っているのかもしれないという気がします。例えば、よく漢族と比較しているけれども、その地域の漢族についての報告書、特に村レベルの調査報告書はほとんどないに近い状態ですね。

漢民族にたいする固いイメージとしては、入植者とか侵入者とか、「泥棒」に近いマイナスの見方という傾向が見られます。例えば、薬草か漢方薬などの利益を狙ってやってきたとか、たまには、国家という「怪獣」のようなマスクをかぶって登場するのは、漢民族ですね。具体的な調査・研究がなされていないまま、歴史的経緯と社会的事実などにも関係なく、そういうような、どこでも通用される漢族のイメージは、最初から研究者の頭の中に存在したのですね。ここには問題があるのではないかと思います。たくさんの場合で、漢族の人々は顔もない、声も聞こえず、無口で黙ったままですが、時には威張って、強いパワーを持って、少数民族の地域に入植し、少数民族を同化しようというイメージですね。無論、それは必ずしも、具体的な事実と合致しない。

ご在席の渡邊先生の言葉を借りれば、漢族は「無徴」、特徴のない漢民族ですね。松岡先生の発表も『藏彝走廊』におけるチベット族と漢族」というタイトルですけれども、参考文献を見ると、漢族についての報告書とかは、一つもないですね。レジュメの「表」ですが、木里県桃巴郷という多民族地域の中、漢族もいると書いていますけれども、具体的に、漢族はどれぐらいの割合があそこに住んでいるか、村レベルの暮らしはどうなっているか、やはりもっと知りたいですね。例えば、その地域の春節は、国家の暦の影響によって、地域に入ってきたのか、あるいは、近隣地域とコミュニティレベルのお付き合いで伝わってきたのか、その辺は曖昧のままでよく分からないのです。

松岡先生のご報告には、中国の「民族」、いわば国家の公認した民族の枠組みにとらわれなくて、少数民族のサブ・グループの細かいところまで、しっかり調べられたことに大変、敬服いたします。チベット族と漢民族の間に、たくさんの下位集団とかサブ集団が存在し、その間の連続性を捉えようとしている学問の姿勢に対しても、私は素晴らしいと評価したい。私は、日本人民族学者に対する指摘というより、自分自身も含めて中国国内の民族学者が反省すべき点として、「民族」の中の複合性をしばしば見落とししたり、無視してしまったりしたのではないかと思います。そういう観点から考えれば、今日の松岡先生のご発表は、サブ・グループまで細かく調査した資料を踏まえたもので、非常に素晴らしいとも思います。中国民族学においては、先入観に近い一つの傾向が見受けられています。それは、既に公認された「民族」の枠組みを当たり前の存在であると思い込んで、学者たちは「民族」を研究対象にしようとする時に、その枠組みを疑わない前提として受け入れ、また、「文化」をその「民族」の枠組みに詰め込むとか書き入れることですね。つまり、「民族」は「文化」をまとめて整理する枠組みになってしまった。これは問題でもあると思います。

そもそも費孝通先生が1978年にご提唱なさった「藏彝走廊」の研究には、ひとつの狙いがありました。それは、多民族国家の歴史をもう一度見直すという事でした。従来は、少数民族の歴史が無視されて、いわば中国の歴史は主に王朝の歴史だった、或いは、漢族が支配民族を中心に編成された。つまり、少数民族の歴史が無視された経緯があるわけで、そして、20世紀50年代に入って、一つ一つの少数民族のために、それぞれの歴史を作るようになったのです。これは進歩だが、新たな問題として、果たしてそれぞれ孤立した少数民族の歴史は成立することが出来るかどうか。56の民族は56の歴史を持つ、みんなそれぞれの歴史を古代まで遡ることが出来るかどうか。費孝通先生はそういう「民族史」に対し、疑問を深く感じたのです。つまり、「藏彝走廊」の構想から、個別の民族、族別的な研究じゃなくて、多民族地域の研究および多民族の共同の歴史を研究するように、呼びかけをしたのです。費孝通先生から提案されたのは、研究方法の転換ですけど、とくにその地域を大変重視したのです。「藏彝走廊」地域では、たくさんの民族集団とその下位グループがありまして、お互いの関係は非常に複雑で、最初から一つ一つ孤立した民族の歴史そのものは存在していないし、成り立ってはならない。また、他の民族を除外して生きる民族もいない。

1980年代に中国西南民族研究会の李紹明先生たちは、費孝通先生の影響を受けて、その地域で調査を始めまして、立派な報告書など、多大な成果を出されましたけれども、その時も漢族存在の重要性を意識していなかったため、漢族調査をほとんどやっていなかった。そういう意味では、多民族地域といっても、最初からは既に漢族を除外してしまったのです。実際は、その地域に数多くの漢族が住んでいますけれども、また、かれらはごく最近その地域に辿りついたばかりでもなかった。地元の少数民族と比較する意味でも、研究すべきなのに。

暦についても、漢族の暦なのか、いわゆる春節を含めて、農曆あるいは官暦など、これはたいへん複雑な問題ですね。国家の暦をそのまま漢族の暦として読みかえることができるかどうか。例えば、学校教育システムや公の政府機関などの休憩制度は、西暦に従いますが、そういう次元の話になると、漢族といえるかどうか。

最後ですけど、我々研究者がある地域に入って、少数民族をとらえる場合は、少数民族の特徴や特別なところによく注目しますが、共通する文化を見落としたりすることもよくあるケースですね。あるいは、共通する文化に興味がないとか、わざわざ共通する文化の中から、これは何族のものなのかと調べていますね。とりあえず、共通する文化が好きじゃないですね。いうまでもなく、我々はもう一度、費孝通先生当初の提案を真剣に考えなければならないと思います。

長くなってしまいましたが、以上です。有難う御座いました。

●**座長**— ありがとうございます。続きまして、高明潔先生にコメントをお願いいたします。

●**高**— 高です。よろしくお願ひいたします。

私は「藏彝走廊」研究を行っていませんが、コメントをする前に、私が松岡先生のご報告のコメントーターになったきっかけについて、若干の説明をさせて頂きたいと思います。

今回のワークショップを企画する最初の段階では、報告者の報告に対して、二人のコメントーターが10分ずつコメントをするよう設定しました。しかし、その後、何名かの参加者の方からセッション設定についてのご提案が私のところに寄せられてきました。提案は「議論を深めようというせっかくの機会なのに、報告者が50分間報告をしたら、おそらく似かよった話ばかりを繰り返してしまい、意味がないのではないか。むしろ、報告は20～30分程度に設定し、もう一人のコメントーターを増やすことによって、議論を深めるようにしてはいかがでしょうか」といったような内容でした。そこで、それぞれのセッションを現在のように調整するに至りました。

松岡先生のご報告にコメントをできる人選は、在席の先生の中に大勢いらっしゃいますが、ちょうどセッションを調整し始めたばかりの段階で、松岡先生に直接お尋ねする機会がありました。すでに設定していた長谷川先生・周先生の以外にもう一人推薦して欲しい、という意味をお伝えしたところ、私が松岡先生に指名されました。そこで、松岡先生の報告に対してコメントすることを引き受けたのです。

私は少数民族研究者ではありますが、フォークロア方法論的な研究は行っていませんし、とくに藏彝走廊についての研究は、私の専門ではないので、本来の意味でのコメントはできないと思います。また、理解レベルのものでありますが、私の藏彝走廊研究の位置づけについての考えは、すでにメモ化して会場に配布しています。それを踏まえ、ここでは、藏彝走廊研究について、「民族関係」をポイントにした考えを述べさせていただきます。

そもそも「藏彝走廊」という定義や藏彝走廊民族研究というのは、民族関係を有効に解決するた

めに、費孝通先生が最初に提起された定義であると思います。そこで、藏彝走廊における研究を行う際、おそらく「民族関係」をどう見るかをポイントにすれば、この研究を行う意義がどこにあるのが、はっきりわかろうかと思えます。また、単にフォークロアの視点に基づいた研究だけでも、その学術的・社会的意義があると言っておきたいのです。

ただ、正直なところ、松岡先生が行っているこの研究は、多大な困難に臨んでいると思います。一つは自然環境がとても厳しいことです。これについては自らの体験によって説明したいと思えます。さきほどの報告の中に出ているパワーポイントにも見えるように、藏彝走廊は海拔の高い地勢に位置していて、各民族集団の集落規模もかなり小さく分散していて、いわば調査し難い地域です。私は中央民族大学民族研究所に勤めていた1986年、中国政府が貧困政策を打ち出したため、雲南少数民族貧困調査を担当しました。ちょうどいま出ているパワーポイントに示されている「蘭坪」（傈僳族自治州）「迪慶藏族自治州」、その西南に位置している彝族自治州を調査しました。「迪慶」は現在「香格里拉」に改名しましたが、あの辺りで約3ヶ月の貧困調査を行いました。このために、この地域の自然環境がどれほど厳しいのか、調査がどれほど困難であるか実感しています。

たとえば、「中甸」は迪慶チベット族の自治州の州政府所在地なので、都市並の町ですけれども、海拔3800メートルの地勢に設けられています。自治州に区画されている県の所在地や村のほとんどは、山と山が繋がっている山間部に設けています。それらの地域の道を歩くたびに、肺部の激しい痛みを感じます。このような地域を研究対象にして、長期に渡って研究を進めている松岡先生の調査活動を、評価したいと思います。

もう一つ困難のところと思う点は、藏彝走廊という地域では、多数の民族がモザイク状に住んでいますので、一つの民族だけを研究する場合、その地域の民族間の交流や文化変容の全体図を捉えるのは困難であると思います。

私は、この地域を対象にする研究を行う場合、イ族の存在を無視してはいけないと思います。というのは、以下の歴史的・社会的背景があるからだと思えます。

藏彝走廊の南には、かつてイ族を主体とした「南詔国」がありました。同じ時期において、東部の貴州の範囲でもイ族の王権がおよんだ「罗（羅）甸国」、北部ではかつて四川大・小凉山という王権のおよんだイ族社会もあります。このため、現在雲南だけでも、イ族の自治地域、その他の民族と一緒に設立した自治行政を含んでおり、恐らくこのイ族の自治行政はどの民族よりも多くなっています。これらの地域は歴史上「西南彝地域」（西南夷地域とも呼ばれるが、ここでの夷は狭義的「東夷」や広義的「夷」の意味合いとは異なっている）と呼ばれたので、彝は民族的な存在であれば、地域を示す存在でもあるという人文系的説があります。単にこの説だけから見ても、「彝」の存在とその文化面の影響は無視することはできません。

イ族をポイントにしてその地域の民族関係を検討してみれば、たとえば、さきに述べた迪慶藏族自治州ですが、その区画の中にもイ族の自治県があり、その辺ではイ族が多いのです。たとえば、1986年時点の調査では、耳にした彼らのことわざの中では、「彝老大・藏老二・納老三…」のようなものがあり、それはその辺の民族関係を兄弟関係のように喩えたものであります。つまり、彝は長男、藏は次男、納西は三男、残念ながら、我が周星先生の漢民族は、最後に並べていたようです。

●周一 次男？

●高一 次男でもなさそうで、七番目であったと記憶しています。もちろん、チベット族が多い地域に行くと、その順番は微妙に変わります。たとえば、チベットは長男（老大）、イ族が次男の順になります。しかし、イ族は三番目以下の順に並べられることはなさそうです。

そして、このような歴史的・社会的に伝えられているイ族を主体とした民族間関係と、現在の政治的構造をあわせてみますと、かなり面白いものを見られると思います。先にお話した1986年時点では、迪慶藏族自治州の州長はチベット族が担当し、中国共産党自治州委員会の書記は漢民族出身者が担当していました。その下部部門の責任者はチベット族とイ族が多かった。納西族や傈僳族は一般職員として働いていた。そして、林業局や財政局に勤めているのは漢民族の方が多かったという様子でした。このような構造に現在どういう変化が起きてきたかは分かりませんが、少なくとも、こうした二重・三重に構築されていた共存関係の中では、イ族の存在感はどの民族よりも強いことは否定できません。

その存在感は、彼らが自らの伝統を強く維持しているところにも見られる。たとえば、1986年時点では、その地域におけるイ族の内部には、その身分制がしっかりと維持されていたようです。当時我われの調査を担当していた州民族事務委員会に務めるイ族の方は、自己紹介した際、その「黒彝」というかつてイ族社会の最高階級の出身をまず説明し、また、彼らは「白彝」（平民層）とは結婚しないとか、他の民族同志と通婚しないということも強調しました。また、その地域のチベット族の人々もとくにイ族の巫師による占いを求めるケースが多く見られていた。我われの調査チームも何回もその占いの現場に居合わせていて、占われたこともありました。

話を収めますと、藏彝走廊における現地調査の資料収集の面において、さきほど周星先生は松岡先生のご報告には、漢民族の慣習や文化の影響などをほとんどが取り上げられていないとコメントしましたが、私は、さきに述べていたような、その原因はおそらくこの地域における歴史背景や民族関係の伝承にも関わっているのでは、と思います。即ち、藏彝走廊研究を行うとすれば、漢民族や漢文化よりは、むしろイ族の文化の影響やその存在を取り上げ、その上漢民族や漢文化を位置づけた方が、面白く結論を導くことができるのでは、と思います。その中での漢民族や漢文化の位置づけが政治的にされることなく、自然に現れるのであると思います。

というのは、少なくとも、1958年時点では、イ族社会はその社会制度を強く維持していて、その地域までやってきた漢民族を奴隷にしたケースもありました。これについて文献にも記録されていますが、残念ながら、全体としては、こういう変わった漢彝関係はいつから、どのように変化させられたのか、明瞭化されてないようです。要するに、この地域がもし古来漢民族が活動していた地域とすれば、あるいは漢民族がこの地域の主要民族であれば、1950年代後半まで奴隷にされるわけはなかったし、1980年以降、「藏彝走廊」のような定義も改めて作り出す必要はないのでは、と思います。

そこで、それ以降の漢民族の身分が政治的（階級的）社会的に転換されてきて、社会的移動も含んで、その社会的・文化的な影響がどれほど藏彝走廊に浸透してきて、または、それによって在来文化にどのような変化が起きたのかについて、もっと実証的な研究が必要であろうと思います。もし実証的な研究が進められれば、この藏彝走廊の根底にある文化の柱、およびその柱の中国全体社会における位置を解明することができ、中国の民族間関係図が漢文化を中心とした一元的な構図から、多元的な構図に移行できると思います。なにしろ中国ですから、その構図が「漢」によって描かれたからである、という思考をより柔軟化と客観化する必要があるのではと思います。

以上の話を踏まえて、松岡先生に二点を確認させて頂きたいです。先ほど写真に出ていたチベット族の葬式が漢民族の影響を受けている証明の一つとされていましたが、白い葬服を着用することは漢民族の影響を受けていると思います。それが漢民族研究者にどう受け取られるかはわかりませんが、後ろに立っている彩りの幡は、漢民族のものではないように思われます。

●松岡— チベット族のチベット仏教です。

●高— チベット族のものであるとすれば、それ（彩りの幡）は在来宗教のシャーマンとの関連もあると考えられます。

それから、もう一つですが、写真にでている「西番の民間暦」とされたものですが、それが「西番」の在来的なものでしょうか、それともイ族の天文暦法の影響を受けた上で持ち続けてきたものでしょうか。というのも、イ族の天文暦法というのは、世界レベルでもかなり有名であって、かなり重要な置位を占めています。その地域に伝えられている民間暦のほとんどがイ族の天文暦法をそのまま借用しているようで、チベット暦の場合チベット仏教暦のまま、しかもサンスクリット語のもので、一目で分かると思います。写真に出ている「西番の民間暦」はどうもイ族の暦のようなものであるという気がします。

これについて、松岡先生に個人的に意見を述べさせていただきます。以上です。

●座長— ありがとうございます。

3人の方にコメントをいただいたのですが、少し論点を整理してみますと、長谷川先生からのコメントは、民族が交流し合う多民族地域において主体的な役割を果たした集団と、他の周辺の集団あるいは漢族とのかかわりのあり方について、例えば時間のサイクルなどにおいてどういう現象がみられるかということが第1点です。

ついで、春節にしても、空間的なファクターを入れたときにどういうことが言えるのか、政治権力の問題が入ってくるかどうか第2点です。それから春節というものが、その民族の独自の文化を読み替えたものかどうか、受け入れたときの受け入れ方によるのではないかという指摘もされました。

国家が果たした意味という点につきましては、周先生も指摘されており、春節祭りは国家の暦にもとづくものなのか、それとも漢族の暦なのか、あるいはコミュニティレベルで行っているのかということだったと思います。周先生はさらに漢族の存在を重視されておりまして、この地域において漢族はどのような役割を果たしたのかということも指摘されました。

高先生のコメントでは、イ族の果たした役割の重要性を特に中甸の事例を中心に指摘されまして、ご質問としては、先ほどのスライドにありました彼らの葬式は、チベット仏教起源なのか、在来のものなのか、また、そもそも暦というものは、もともと西番が持っていたものなのか、イ族の天文暦法の影響を受けているのかという点を指摘されました。

それではこれらの点につきまして、簡単に報告者の松岡先生にお願いしたいと思います。

●松岡— 貴重なコメントをいただきまして、本当にありがとうございます。きちんと答えなければいけないと思いますが、答えきれないものもあるので、いくつかだけお答えしたいと思います。

まず春節の受け入れ方ということですが、春節をどうやって受け入れていったかについては、予稿集の29ページに書いております。漢族は清代にこの地域を改土帰流するときに軍隊と一緒に入ってきたり、漢方薬を取る者として入ってきました。そのころに来た漢族というのは非常に貧しく、どこにも行くところがなくて、ここでひと旗上げようかといって入ってきたので帰るところもないため、地元のチベット族などと結婚していくわけです。それが北のギャロン・チベット族などに表れておりますし、大渡河流域のチベット族のところに非常によくみられます。

では、春節をどのように受け入れていったかという点、あまり強制的に受け入れるやり方はして



いないようです。ここの表にもありますけれども、じわじわと受け入れました。どのようにじわじわかという、中華人民共和国になって、最もまとまった休みを取るようになったのは学校と公的機関で、春節のときに休みを取るのです。外に出ていった地元のチベット族はそのときに帰ってくるので、春節にみんなが集まるということで、じわじわと春節が彼らのなかに入っていきます。あまり国家がどうしろと言ったわけでもなく、じわじわと入っていったと思います。チャン族は比較的それが早かったし、ある時期にチャン族は出稼ぎに行っていたのですが、春節のときに稼ぎに行っても、みんなが休んでいるので無駄だということで戻ってくるのです。

西番のほうは、中華人民共和国になってから春節がだんだん入ってきます。ですから、ある時期までは12月に「ヲシ」もやるし、春節のときに「ヲシ」と同じようなこともやっていました。「ヲシ」が大事なのは山の神祭りで、それから前日の夜に成人式をおこないます。13歳になった男女が親族からいろいろな贈りものをもらい、山の神祭りでみんなが集まったときにお披露目をするということをやります。すると、みんなが集まってくるということで、成人儀式もだんだん春節のときの大みそかにもおこなわれるようになりました。ここには、いかにもいまも「ヲシ」があるように書いてありますが、いまどちらがよくやられているかという、やはり一番人が集まる春節のときに、「ヲシ」でやったようなことをやっているのが現状だと思います。

それから、いま彼らが春節で一番楽しみにしているのは、昨日の曾先生のお話にありましたが、『春節晚会』をテレビで見ることです。漢族社会の主体民族は漢族ですから、そうやって徐々に漢族の文化が入っていったというのが、春節の受け入れ方だろうと思います。

ですから、彼らにとっては漢族社会が国家です。漢語を覚えることもそうだし、漢語を覚えないと稼ぎに行ってお金が稼げない、学校にも入れないということで、自分たちの言葉よりも漢語をやるようにというのが親の意思なのです。チャン族とかギャロン・チベット族は、徐々に春節を受け入れていったということを、まずお話ししたいと思います。それは学校教育や国家としての休みの取らせ方ということが、彼らに影響を与えているのです。

ほかに何をやっているかという、漢族の端午節や中秋節などはあまりやりません。そのかわり三八婦女節とか十一の建国節など、新しくつくったものがこちらのなかに入っているのが現状です。現状の報告ということで、お許しいただければと思います。

もう一つ問題になっているのは、イ族との関係です。このあたりの民族構成がどのようになっているかをお話ししなければいけないと思います。

この地図を見ますと、これはいかにも平面に見えますが、成都から西側がチベット高原で一番東になります。成都が海拔約500メートルだったと思いますが、灌県より西にどんどん1千メートル、2千メートルと上がっていくところです。そして、この康定がチベット高原の境になるところで、かつてはこの東側から漢族が来て、西側からチベット族が来て、ここが交易の場になっていました。

また、石綿を境に、ここより南にイ族が集中して住んでおります。いまの人口から言うと、この冕寧ですが、ここは漢族の人口が70%、イ族が28%、そしてチベット族やその他の民族がいます。地図の黒い部分は木里で、もともとチベット族の地域で、峡谷と大河川が南北に走っていて行くのがとてもたいへんなところなのですが、ここですら全体から見ると漢族が30%、イ族が20%、チベット族が10%で、チベット族が押されています。

それから九龍もだいたい同じような比率ですが、イ族が一番多いです。この地域から言うと、先ほど高先生もおっしゃったように、人口的には圧倒的多数を占めているわけではないのですが、イ族の文化が極めて強いということは言えると思います。イ族の文化というよりも、歴史的に見て中

華人民共和国になる前、イ族はこの地域に武力によって進出していきます。そしてチベット族はどんどん追われて、ある地域に集中していったというのがこの地域です。

その強いイ族に対して、地元のチベット族は漢族と手を結んで戦ったという話を、ずいぶん聞きました。一番弱い漢族は奴隷になって連れて行かれてしまいます。奴隷が多かったのは、このへんの弱い漢族です。このあたりは、何といてもチベット仏教の大寺院がありますから、チベット族は応援をもらえます。

先ほどのナムイ・チベット族ですが、ここは垂直方向の住みわけを考えなければいけません。一番高いところにイ族がいて、その次にチベット族がいて、下に漢族がいるのです。人口的にはそういう分布になっておりますけれども、彼らが同じ村で一緒に住むということは、ほとんどありません。それぞれが集中していて、ナムイ・チベット族は山の上のほうにイ族と隣りあってくらしっているとときには火把節を一緒にやります。ところが山を降りてふもとで漢族と共に暮らすようになると、もう火把節はやらなくていいのだと言ってやめてしまいます。そして漢族と同じ祭りをするのだというようになります。

それがナムイ・チベット族の一つの生きていく知恵といますか。その代わり自分たちのプライドはとても高く、自分たちは大西番なので、漢族やイ族とは絶対に結婚しないとっています。

●座長— どうもありがとうございました。



●座長— 司会の不手際でたいへん申しわけありません。残り時間が5分になってしまいましたけれども、フロアのほうでご質問、ご感想などがありましたら、お二人ほどお願いいたします。櫻井先生、どうぞ。

●櫻井— 松岡先生は、春節をはじめとする漢族の暦を取り入れたことについて、「共生」という言葉を使われました。言葉の揚げ足取りをはいけません、いまわれわれが漢族、少数民族、あるいは民族間関係という話をしているときに、「共生」という言葉を使った場合に、われわれがイメージしているものがばらばらであっては議論になりませんので、松岡先生がおっしゃる共生の意味を確認させていただきたいのです。

いまは日本も多文化社会になって、多文化共生社会ということが言われます。この愛知県はトヨタもありますし、いろいろなところで外国人労働者がいて、私の知っている例としては、西尾市にペルーの人がたくさん来ています。

西尾市の例は、地域のコミュニティの人たちと、ペルーの外国人労働者の共生が非常にうまく成功した事例として、全国的にも報告されています。どこでもあることですけれども、いろいろなコンフリクトがあって、町内会費を払わないとか、ごみの出し方や夜中に騒ぐなどの葛藤があったのですが、地域の人たちとの話し合いのなかでうまくいって、いまはペルーの人たちもいろいろなコミュニティの活動に参加しているということです。そういう報告が、社会学のほうで発表されることがあります。

当然そのときに、いま使った共生というのははたして共生なのか、それは同化ではないのですかという批判ないし疑問もあるのです。

普通一般に、こういうマイノリティーがマジョリティーの世界に入ってきて共生といった場合に、すべてが平等であるあり方が共生ではないでしょう。マジョリティーの秩序や安定を乱さないかた

ちでマイノリティーが生きていくことが、ある意味では地域社会の共生だと思うのです。もちろん、それが正しいかどうか、そういう言葉の使い方はわからないけれども、少なくとも私にとって共生といった場合に、そのようなイメージを持つわけです。誤解のないように言っておかなければなりません。マイノリティーはマジョリティーに従属すべきだとか、マイノリティーの権利主張を私は否定しているわけではありません。

いまの松岡先生の内容で一つ面白いと思うのは、圧倒的に多いマジョリティーの漢民族がマイノリティーのなかへ入っていくときに、マジョリティーのものをマイノリティーが受け入れるかたちでの共生です。一般的な、マジョリティーのなかにマイノリティーの人が入っていくことではなくて、逆の例になっているわけですが、なぜそのようなことになるかという、一つにはやはり背後に大きな国家というものがあるのだらうと思うのです。

ただ、松岡先生もこの文章に書いていますけれども、このように受け入れて国民になっていくこと自体に共生という言葉が使われる、その言葉の解釈について少しお答えいただければと思います。

●松岡— 十分に考えなければいけない問題ですが、民族地区の漢族というのは、数から言うと非常に小さいです。民族地区の少数民族が漢族です。中華人民共和国になって一番違ったのは、国家というか、政府が末端まで入ってくるようになり、政府側の漢族は実際にムラに訪ねていくのです。そうすると漢族は少数民族ですが、先ほど先生がおっしゃったように国家というものを背負っておりますから、少数民族側はそれを受け入れるということです。

ただ、その受け入れ方も非常に厳しいものではなくて、例えば先ほどの暦でいうと、三八節のときに三八節をやるのだとか、女性は休むとか、建国記念日にはみんなで休もうよという程度で、その中身についてはとやかく言っていない、干渉していないというのが末端ではないかと思うのです。

少し答えがずれているかもしれませんが、末端の人民政府の一番上は地元の少数民族であって、少数民族をかなり多く登用しています。特に郷長の場合は、必ず少数民族にしないと末端の者は政府のさまざまな方針を聞きません。すると、この共生は何かというと、私は不用意に使っているかもしれませんが、イメージとしては全体の枠のなかでは国家というものがあるけれども、何かの際にはそれぞれが自分のやりたいようにやるというか、そういう緩い導入のしかたです。イ族はイ族のやり方でやっているし、チベット族はチベット族のやり方でやっているというのが私の感触で、それぞれが比較的国家という枠組み、法律を侵さなければ、自分たちの生活なりをやっているという状態を、共に生きるという意味で使っております。

●座長— ありがとうございます。残念ながら時間がきてしまいました。

多民族共生の場で相互の影響を受けながら民族の文化はどのように変化してきたのか、そして現状はどのようなものであるかという重要な問題が提示されました。さらに、民族関係の問題、さらに下位集団の問題など、さまざまな問題をかなりの部分明らかにしていただきました。今後この場で掘り下げていくべき問題も多々あるかと思えます。

先ほどのコメントやご質問にありましたような国家がかかわってくる問題も重要な論点の一つにならうかと思えます。その点は次のセッションに引き継いでいただければと思います。

それでは、このセッションを終わらせていただきます。松岡先生、コメンテーターのみなさん、ありがとうございます。